

大潟村干拓博物館と地域活性化

Regional Activities with Polder Museum of Ogata Village

薄井 伯征*
USUI Noriyuki*

1. 秋田県大潟村とその地域的課題

秋田県大潟村は、戦後の食料不足の解決とモデル農村の構築を目指し、八郎潟干拓工事により八郎潟の湖底に昭和39年に誕生した新しい自治体である。昭和42年から49年まで、国により5回にわたる入植事業が行われ、試験により入植者が選抜され、そしてゼロからの村づくりが行われたという特異な歴史的経過をもっている。現在、大潟村では入植者の半数以上が後継者に農業の経営移譲をしている。村内の小中学生は入植者から数えて3世代目に相当し、急速に世代交代が進んでいる。八郎潟干拓の意義、村の発足や発展の様子など、その当事者である入植者とその後継者以降の世代との間には歴史的経緯に対する認識の大きなギャップがあり、干拓事業および村の歴史を理解し、後世に継承していくことは干拓地大潟村の責務ともいべき地域的課題である。また、後継者世代は現在多様な農作物の栽培に果敢に挑戦し、干拓地大潟村の魅力創出を試行錯誤している。村の基幹産業である農業を文化資源ととらえ、地域住民とその魅力を創出し、顕在化させることは、地域振興・地域活性化につながる村の大きな課題である。

2. 大潟村干拓博物館の現実

大潟村は平成12年、八郎潟干拓事業や村建設・存立の意義を後世に伝え、教育及び都市と農村との交流を促進する目的で大潟村干拓博物館(以下、博物館)を建設した。博物館では当初、「大潟村総合的な学習のマニュアル」を作成して小中学校に配布し、干拓の歴史と農業をテーマに総合学習等での利用を呼びかけるとともに、大潟村案内ボランティアを養成し、入植者自らが八郎潟干拓と大潟村の歴史について、博物館を含む村内全域をガイド案内するシステムを構築した。博物館の展示や村の農業環境資源と連動したこの取り組みは一定の成果を収め、来館者と案内ボランティアにとっては有意義なものとなったが、村の小中学生や住民を対象に歴史を伝える学習支援活動については断片的・限定的であった。また展示面では農業振興につながる演出も十分でなく、上記の地域的課題の解決に応えることができず、結果的に博物館の使命を十分に果たせていない状況であった。

3. Akita ふるさと活力人養成セミナー

地域的課題の解決のためには、地域の博物館は具体的にどのような役割を担うべきなのであろうか。筆者は、平成17・18年度に開講された「Akitaふるさと活力人養成セミナー」に参加した。講義・実践の繰り返しによるセミナーで得ることができたのは、地域内の様々な資源の再発見とその活用上の制約要因を整理できたこと、地域内の文化資源の潜在的・顕在的魅力を再発見できたこと、交渉と合意形成、共通理解＝マネージメント能力の重要性を認識できたこと、失敗を恐れず情熱をもった行動が重要であること、異業種の方々とのネットワークの構築が重要であること、であった。

4. 具体的なアクションの検討

早速セミナーで学んだことを生かし、博物館で何ができるのかを考えた。すなわち、博物館の既存の文化資源(＝収蔵資料)を生かし、地域住民が持っている知識・技術・能力・成果を文化資源

*大潟村干拓博物館 *Polder Museum of Ogata Village, Ogata Village, Akita Pref.

キーワード：地域活性化，博物館，学社融合，チューリップ，大潟村

として顕在化させ、そして地域住民と連携し、地域活性化につなげるための手法である。具体的には、学社融合による地域の歴史を後世に伝えるための教育教材開発、農産物をテーマとした参加体験・交流型の企画展示事業の実施、である。

5. 学社融合による教育教材「大潟村歴史かるた」・「大潟村歴史すごろく」の開発^{注)}

平成 18 年度に「大潟村歴史かるた」¹⁾を、平成 19 年度に「大潟村歴史すごろく」を、大潟中学校、地域住民、博物館の連携・協働により開発した。これは、村の地域的課題である「干拓事業および村の歴史を理解し、後世に継承していく」の解決のために、あえて学社融合型の事業として実施したもので、家庭等で楽しみながら地域の歴史を学べるように工夫してある。開発は中学校の正規の授業の中で行われ、入植者・入植第 2 世代・入植第 3 世代(中学生)がいっしょに創作したのが大きな特徴である。さらに成果品である「かるた」「すごろく」を村内全世帯に配付し、学習成果を地域社会に還元した。この一連の取り組みにより、学校と地域社会との間で地域的課題に対する問題意識の共有をはかることができた。そして「かるた」「すごろく」遊びが家庭で行われることにより、地域の歴史を家族間で共有し、併せて世代間交流を促進することができたと思われる。すなわち、地域住民に地域の歴史を身近に感じ、振り返るきっかけの一助になったと思われる。また、開発過程においては立場の異なる多くの村民が目標を共有し、その目標の実現に向けてそれぞれが創意工夫して実践することができた。これらの取り組みは何度も広報や新聞等で報道され、村の歴史を多くの村民が再認識し、共有し、後世に永く伝えていく意識を醸成できたと考えられる。

6. 特産のチューリップを使った企画展「Polderlip Wave 2008 大潟村チューリップ作品展」の開催^{注)}

大潟村は東北一のチューリップ生産地であり、オランダから球根を輸入し、11月に定植され、2月に切り花として出荷される。米以外の農産物の認知度向上と販売拡大は農業振興につながり、村の大きな課題である。この企画展では農産物のチューリップを文化資源と捉え、その魅力創出に生産者・博物館・村内の生涯学習団体が連携・協力して取り組み、企画展示事業を実施し、地域の農産物の魅力を地域住民・来館者に PR したものである。本年は 2 月 15～17 日の 3 日間行われ、展示等に利用したチューリップは 53 品種 3,000 本にのぼり、これらを利用したアートの生け花が 53 点、押し花が 21 点出展された。期間中は猛吹雪の悪天候であったが、入館者は 1,906 名を数え、参加体験事業も盛況であった。この企画展は魅力創出を考案した各団体が直接参加体験型事業を実施することが大きな特徴であり、どの団体も多くの参加者の交流が深められ、そしてチューリップを通し、それぞれの団体の活動分野の魅力を伝えることができ、充実感を得ることができた。また、博物館に隣接する農産物直販施設「産直センター潟の店」で、企画展にあわせて「産直まつり」が本年初めて開催され、多くの来客で賑わった。企画展の実施により、農産物であるチューリップの魅力創出とともに、地域振興並びに活性化に大きく寄与することができたと考えられる。

7. おわりに

地域振興・地域活性化への取り組みにはゴールはない。一時期は成功したようにみえても、数年経つと陳腐化し、逆に地域活性の阻害要因ともなりうる。地域住民とコミュニケーションを楽しみながら、事業の結果を反省しつつ、大潟村らしい、新しい「次の一手」を企画し、実践していきたいと考えている。

注)：平成 18 年度の「大潟村歴史かるた」創作、平成 19 年度の「大潟村歴史すごろく」創作と企画展「Polderlip Wave 2008 大潟村チューリップ作品展」は、文化庁芸術拠点形成事業の支援を受け実施したものである。

参考文献

- 1) 薄井伯征(2007)「学社融合による地域の歴史を後世に伝える教育教材の開発と生涯学習支援上の課題 - 『大潟村歴史かるた』づくりを通して - 」, 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 第 29 号, 113-129